

改革⑦ 開成町議会広報改革について

時勢にあった改革を大胆に推進！
～「読む」から「見る＝魅せる」改革～
議会ウェブサイトを開成4年9月に開設
広報紙とウェブサイトの両輪で広報改革を進める
「一人でも多くの町民に、まずは手に取ってもらいたい」



「一ページめくってもらいたい」という信念を持ち、毎号デザインや構成に変化つけて発行

なぜ「今」、「読む」から「見る」なのか

1 情報を迅速に発信する必要性

新聞は前日の記事が掲載されるが、情報はSNSで即時受け取る時代⇒議会活動の発信も迅速化が必要。約2か月後の広報に掲載するのでは遅い。

2 情報をわかりやすく発信する必要性

ホームページに(PDF等)貼り付けて終了していたが、町民に読ませることで満足せず、**動画を取り入れて議会から話しかけ、呼びかける「みていただく」ことが必要**

議会独自のWEBサイト開設



ただし、すべてをデジタル化すべきではないため、紙面での発信も継続していきます。

3 取組みを進める上で

- 1 広報が、議会活動が「議員」ではなく「議会」活動として、町民目線での発信となっているか。
- 2 幅広い世代に議会に関心を寄せていただく取組みとなっているか。

3 「今」の取組みが時勢に合わない場合は、見直す勇気も必要。

広報改革を進める体制

【課題】

- ① 広報分科会と広聴分科会の連携が必要
- ② 動画編集や広報デザインの知識が不足
- ③ 新たな取組みのため、事例が少なくノウハウがない。
- ④ 一過性の取組みではなく、将来的に継続した取り組みとしていくことが必要。

4 取組みの成果

- ・議会だよりについて賛否が届くようになった
- ・YouTubeの再生回数がリアルな反応として実感がもてるようになった
- ・身近な議会となるために議員自らが動くことで「動き」を通じて発信することが浸透し、開かれた議会の実現につながっている

改革の成果として

令和3年度から令和5年度まで、**全国町村議会表彰を3年連続受賞** 令和4年度は、**町村議会特別表彰**を受賞

第18回マニフェスト大賞 議会改革賞受賞

「2年間の日本一たきに渡る議会取組み」

「議会広報の改革について」



○所感

(中牧盛登)

- ・開成町議会の広報改革は、議会だよりとウェブサイトの両輪で進めている。まさに「読む」から「魅せる」の改革を実践している。
- ・当市も同様なことをできないわけではない。
- ・当市議会ICT化の取組みにあわせて、なんとしても実現しなければならない議会改革のひとつである。

(小澤悟)

- ・議会広報(議会だより)は委員が中心となって議会報を制作している。ただ、その制作のプロセスは町村議会と市議会とでは大きく異なる中、読者に伝える・伝わる議会報にする必要があるため今の時代にあった広報にする必要があると考え視察を行った。

- ・議会が市民目線で皆さんが現状では満足しておらず常に進化していきたいと言う思いが強く伝わってきた。
- ・職員の方の、「読ませるより とりあえず見ていただく、という、興味を持たせるための工夫を感じた。
- ・大町市議会もどれだけ市民の読者に、読み・見てもらっているかを一度調べ、現状で満足せずペーパーレス化も含めしっかりと検討していくべきだ。
- ・20秒動画については、すごい！の一言で、すぐにまねができるかといえば難しいのかもしれない。しかし、この開成町の事務局・議会の町民の方々への向き合い方は、当市でも参考にできることがあると感じた。



(一本木秀章)

- ・開成町は通年議会を開催して、町民の議会参加を進めている。
- ・議会広報改革はウェブサイトやSNSを活用して、リアルタイムで議会の情報を提供すると共に議会の中継や録画配信を行い、市民参加の促進をしていた。
- ・デジタル化を促進したことにより、議会だよりをタブロイド判に変更して見やすい、わかりやすい「議会だより」にして、読むから見る議会だよりに変えている。
- ・議会のICT化をいち早く推進したことにより、議会改革が進んでいると感じた。大町市議会もこれから、タブレットを導入しますが、開成町を参考にして、ICT化を進め議会変革を推進していきたい。



(傳刀健)

- ・議会がチームとしてまとまっていることを強く感じた。そのため、町民の議会に対する関心も非常に高い。日曜議会の開催にあたっては傍聴にあふれる町民がホールで配信動画を見るとき。
- ・広報（議会だより）は住民が議会へ関心を抱く一番身近なツールである。冊子の広報からタブロイド判の広報、「読む」から「見る」へ切り替えビジュアルで住民の関心を引き付けることに成功している。そして広報委員会を常任委員会化していることで、常に新しい発想で広報が発行されていることに工夫と、「チーム議会」の強さを感じた。



・20秒動画についても、各々の議員の工夫がみられ、住民の代表機関として町政に取り組む姿勢が身近に感じられ非常に有効である。

こうした取り組みの舵取りを一人の事務局員が中心となって行ったこと、その改革を支持し、皆で改革に取り組んできた開成町議会の一人一人に尊敬の念に堪えない思いである。

(3) 山梨県北杜市

日時：7月16日（水）10時00分から12時00分

○北杜市の概要

市政施行：平成16年11月1日

人口：45,410人（令和6年4月1日現在）
22,123世帯

面積：60,248 km²



北杜市市章

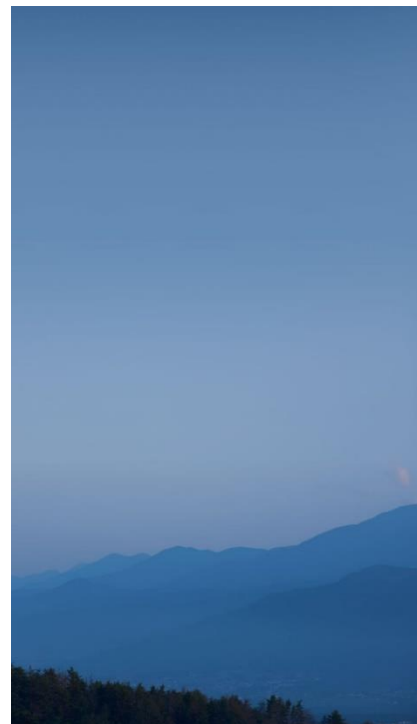
北杜市の国立、国定公園

- 1) 国立公園 ・南アルプス国立公園 ・秩父多摩甲斐国立公園
- 2) 国定公園 ・八ヶ岳中信高原国定高原

水の山プロジェクトについて

「水の山」プロジェクトとは

南アルプスユネスコエコパーク登録を機に、名水の里日本一の北杜市と水資源の保全活動を積極的に行う企業が、互いに手を結び南アルプス地域を起点に世界に誇る「水の山」としてその価値を世界に広め、市民の皆様と共に北杜市全域の地域活性化を目指していくブランド推進プロジェクトです。



水の山ユースアイデアプロジェクト

北杜市内で水資源の保全活動を積極的に行う「水の山」パートナー企業7社と、北杜市内にある3つの高校（山梨県立北杜高等学校、学校法人帝京大学帝京第三高等学校、北杜市立甲陵高等学校）が連携して行う取り組みです。



市内で学ぶ高校生に、地域の特徴である水や自然環境について知る機会や地域の未来を考える機会を提供し、シビックプライドの醸成と持続可能な地域づくりの必要性の浸透をはかるとともに、それを通して、「水と暮らすサステナブルなまち 北杜市」のブランド価値の構築を目指します。

なぜ「水の山」なのか

～世界的にも珍しく貴重な地形と地層が豊かな水を育む～

“日本の屋根”として数えられる南アルプス。この地帯は、ユーラシアプレートの下に東から北米プレートが衝突して沈み込み、さらにフィリピン海プレートが南から衝突し、急速な隆起が起こることで3,000m級の山々が形成された、3つのプレートが交錯する、地球のダイナミズムが感じられる稀有な地です。

また、北杜市は花崗岩を始め多様な地質と地層からなり、70を越す湧水や滝が分布し、太古の縄文時代から人間が巧みに利用してきた八ヶ岳エリア、日照時間日本一の広大で肥沃な農耕地帯である茅ヶ岳・瑞牆山エリアも広がります。

ユネスコエコパーク

ユネスコエコパークとは、Biosphere Reserve（生物圏保存地域）の通称であり、人と自然の共存活動に率先して取り組んでいる地域として、ユネスコに認定されたエリアです。国内には10地域が登録（2023年1月1日時点）されており、そのうち北杜市には、南アルプスと甲武信の2地域が登録されています。ひとつの自治体に2つの登録地があるのは世界で北杜市だけです。



南アルプスユネスコエコパーク

2014年6月12日に南アルプスユネスコエコパークに登録されました。

北杜市では、甲斐駒ヶ岳等の山々、尾白川等の清流、武川産米等の農産物に代表される資源を活用した魅力あるまちづくりにより、自然や文化を次世代へとつなげるため活動に取り組んでいます。



南アルプス
ユネスコエコパーク

甲武信ユネスコエコパーク

2019年6月19日に甲武信ユネスコエコパークに登録されました。



甲武信
ユネスコエコパーク

北杜市では、歴史と文化薫る金峰山や瑞牆山、茅ヶ岳などの名山、日照時間の長さや肥沃な土壌で生産される果樹等を活かしながら、源流域として人々の暮らしにつながるまちづくりに取り組んでいます。

マスコットキャラクター

2世界に誇る「水の山」を象徴するキャラクター「ミズクマ」を開発。森林生態系を代表し、森と人が共生するシンボルであり、市内にも生息する「クマ」と「名水」をあわせ、「ミズクマ」と呼びます。ポスターやのぼり、市職員の名刺など市内を中心にあらゆる場所で掲出し、積極的に活動をアピールします。



○所感

(中牧盛登)

- ・北杜市は、市民が水の価値に気づいていない課題があるとして、中高生向けの教育を行っている。
- ・市内3高校が学校の枠を超えて、サポーター企業が相互に学校と企業を行き来し、水と暮らすサステナブルな街の共感を生むための体験学習会や講演会、企業視察を実施するなど取り組んでいる。
- ・本市としても、北杜市の取り組みを参考に、中高生を対象に水資源や水の活用などについて学びを深めていく工夫を考え実践してはいかかと思う視察であった。

(小澤悟)

- ・北杜市内で水資源の保全活動をパートナー企業7社と、北杜市内にある3つの高校が連携して行うという部分が、当市の「みずのわプロジェクト」との大きな違いを感じた。
- ・北杜市は市民に「水の山プロジェクト」の認知度が低いという課題をしっかりと認識し、その認知度の低さを上げる取組みとし水資源の大切さを中学校教育に取り組んでいる。実感として当市も似たような課題があると感じた中、北杜市は市民アンケートの実施を行い、課題解決に向けて取り組んでいる点を当市にも参考にさせていただきたい。

(一本気秀章)

- ・北杜市は自然と人間社会の共生を目的とするユネスコエコパークに認定されている。そこで、世界に誇る「水の山プロジェクト」を推進している。これは地域活性化を目指していくブランド推進プロジェクトである。
- ・このプロジェクトは北杜市の豊かな自然環境と水資源を守りつつ、地域の持続可能な発展を目指す取組みである。このプロジェクトを通じて、北杜市は美しい自然と豊かな水の恩恵を次世代に引き継ぐことを目指している。
- ・大町市でも、もっとブランド推進をしないといけないと感じる。北杜市のサポーター企業は35社に及び、名水にこだわる製品の開発や販売をしている。当市でもぜひ参考にさせていただきたい。

(傳刀健)

- ・大町市で行っている「みずのわプロジェクト」と非常に類似した事業であり、2015年から取り組んでいる事業である。大町市のみずのわプロジェクトよりも6年ほど前から取り組んでいる。北杜市では、水がシビックプライドになりえているのか、対外的に認知されているのか、いかにして水でまちづくりを展開するのか伺ってきた。
- ・古くから水のまちとして全国的にも広く深く認知されている北杜市であっても、シビックプライドにつなげることや、認知度向上につなげるための課題は多いようである。プロジェクトの主導は観光課が主体のようであるが、観光客増への課題もあるようである。



しかし、地元高校生プロジェクトへの参画や、地元企業の携わり方には大町市のプロジェクトに比べ活気があるように思えた。

大町市では、このプロジェクトのビジョンが非常にわかりにくいいため、産学官金連携プロジェクトとして発足しているが、地元高校生や企業の携わり方に物足りなさを感じる。さらにビジョンを明確にしたうえで、多くの団体企業が携われる仕組みを拡大してほしい。